

「妙法」の夢

東の空遙かに大文字が点り、やがて北の夜空に「妙法」の火文字が大きく浮かび上がってくる。

恩師 小西行雄先生はこの日もご自宅に近い加茂川堤に浴衣姿で立たれた。先生は繊維化学の世界的な学者である。そして草書にもご造詣の深い方でした。

「妙」の見事な流れる様な字形に何時も感嘆の声をあげられながら、「法」の活字崩れの様な字形には何故であろうかと、お気遣いの様子でした。

また、今でこそ左読みで「妙法」と読むが、当時右読みの時代に何故連読し難い「法」が書かれたのであろうか、こんな気がかりが先生の脳裏に夢の様に残されたのである。

或る日、先生から一通のお電話を頂いた。

「君は最近郷土史探訪に熱中のご様子、機会があれば、この二件も調べてくれませんか…」と。

かねてよりの思いもあり、私は早速に文献の調査に、そして地元の長老達をお訪ねしたのである。

妙法の送り火は お迎えした先祖の精霊を、再び浄土へお送りする宗教的な行事であり、八月十六日の夜 松ヶ崎「妙法」の火床に火がともされるのである。松ヶ崎は御所の米処として、荘園に禁裏農耕に、平安遷都を含め代々御所にお仕えし栄えた村である。

鎌倉末期 松ヶ崎に先住していた西村の住民は、村中が日蓮宗に改宗したことを祝って、日像上人の許で経文の一字「妙」を頂き、松ヶ崎西端の西山に火床文字を造成した。1306年のことである。

一方、少々遅れて移住してきた隣村東村は「妙」に遅れること約 300 年江戸時代初期に、同じく象徴文字「法」を頂き、日良上人の指揮で東山に火床を造成したのである。

両村には規模の差こそあったが、東村が造成に最も苦勞したのは、東山の狭隘と凹凸の大地、そして「妙」の恵まれた大地の傾斜に対して、その角度が余りにも低いことであった。火床に適当な場所が得られず当初は棒の先に松明を括り付けて燃やすケースも多かったと云われる。現在の火床数は「妙」の 103 基に対して「法」は 63 基である。

さて、「妙法」の連読であるが、当時は右読であり妙法とは読み様がない、左読になった天啓奇遇の結果「妙法」になったのである。

「法」もまた日蓮宗経文や法華の宗派に馴染む文字であり、村の一文字象徴として選ばれたのであるが。地元の人には「法華」の法から選ばれたことを殊更に強調される。「法華」は天皇賜号の宗号であり、宗派の正当性や元祖性が秘められている。300 年待ち焦がれた村民がより高い象徴文字に強い希求があったとしても、それは決して不思議ではない、村の長老もこれを否定されなかった。

両村の関係に私の故郷近江の例を思った。先行して天秤棒を担いだ八幡商人と後発の五箇庄商人の間にはそれは厳しい競合の世界があったが、一方でまた親しく助けあって、あ

の近江商人の大道を全国に成し遂げたのである。

この夢の様な私の調査記録を当時喜寿間近の私から、米寿を越された恩師にお届けしたのである。

その後も私は機会を見て幾度となく「妙法」の火床を訪ね歩いた。資力にも恵まれず、村の家数も火床数と余り変わらぬ少ない人たちに依って、辛苦と情熱の中に造成を成し、夏祭りの伝統を継承し、その夜景を都人にも届けたのである。今になお生きて現世に貢献する偉大な文化遺跡を思った。

一方、私は今日のコンピューターなどの技術を用いて火床の位置を是正し、より美しい文字を京の夜空に輝かせる可能性を考えていた。流れるような「妙法」の二字がいずれの日にか京都の夜空に飾られるのであろうか、この夢の様な期待が私の脳裏にまた踊るのである。

送り火を終えた夜、村人は松ヶ崎山麓の涌泉寺の庭に集い「題目踊り」に夏祭りを祝った。現在も広い深淵の樹林に囲まれたこの庭に、両村の人はもとより近年に移り住んだ人達も仲良く交って踊りが弾んでいる。浴衣姿に団扇を手にする人の輪が幾重にも広がりながら。

単調な動作の踊りを南無妙法蓮華経の中で繰り返す「題目踊り」に夜は更けてゆき、思い出した様に打ち鳴らされる大太鼓の響きがまた静かに村の中にも響きわたって行くのである。この「題目踊り」こそは日本の盆踊りの始まりとも云われている。村の発行誌記録には徳治元年（1316）七月十六日の発祥が記録されている。

大地に生きる情熱と美しい自然に育まれた信仰の心が「妙法」の送り火と「題目おどり」を造り得たのであろう。古来日本の素晴らしい農村文化を見る思いである。発祥や継承の史に、なお多くの謎が残されるが、学びの中に際限のない夢が拡がるのである。

（昭28・色染 西川三郎）

「追記」

当稿は或る文芸誌の寄稿要請に応じて執筆したものです。

云うまでもなく「松ヶ崎」はわが母校の所在地であり、松ヶ崎村は多くの同窓が下宿などで居住した懐かしい村です。

また「妙法」は八月十六日の夜母校の裏山に大きくその火文字が燈されますが、戦後、妙法両山の同時点火に母校グラウンドに点火を知らせる火床が設置される時代がありました。点火後学生たちはグラウンドにファイヤーストームを大いに楽しんだものです。